都藝泥布

京都地名研究会　会報　第 66 号

2019 年 6 月 26 日発行

題字「つぎねふ」（山城の枕詞）

揮毫　吉田 金彦氏 （本会顧問）

編集　京都地名研究会事務局

2019 年度　総会　講演会　報告

さる 4 月 28 日（日）龍谷大学大宮学舎において 2019 年度総会・講演会が開催されました。金坂清則副会長の挨拶で始まった総会は、中島正理事の議長で滞りなく議事が進行し、全ての議案について承認されました。講演会では、入江成治理事の司会で、小寺慶昭会長より開会の挨拶がありました。参加者は 52 名、内訳は会員 40 名、一般 12 名でした。

総会について

第一号議案　　2018 年度　活動総括 決算

1　総会・講演会　4 月 22 日（日）

2018 年度　第 17 回　総会・講演会 51 名参加

テーマ「地名から日本の古層をさぐる」

講演者　文筆家　伊東　ひとみ氏

地名の入門的なお話をしていただくようお願いした。今後とも多くの方に興味を持っていただけるよう、幅広い専門領域から講演者を選ぶ。

2　地名フォーラム

①第 49 回地名フォーラム　　43 名　参加

日時　2018 年 7 月 22 日（日）14:00～17:00

発表 1　中世祇園会御旅所について

小西　　宏之氏（本会理事）

発表 2　近世以降の「西陣」の地理・地名をめぐって

中井　幸比古氏（神戸市外国語大学教授）

小西氏は中世の祇園会の御旅所が三箇所あったという仮説に基づく論考をされた。中井氏は西陣における職能による地域の住み分けを資料に基づいて緻密に考証された。

②第 50 回地名フォーラム　　25 名　参加

日時　　2018 年 10 月 28 日（日）14:00～16:15

場所　　アグリセンター大宮

テーマ　京丹後の伝承と地名

発表 1　浦島伝説の地名

～水ノ江、墨（澄）ノ江、薗を巡って

森　　茂夫氏（歴史研究者）

発表 2　木津郷と木津庄　～古代から中世への変遷～

新谷　勝行氏（京丹後市教育委員会文化財保護課）

森氏は浦島伝説と資料を対照させながら興味深く話された。新谷氏は時代の変遷とともに地名が推移していく様子をわかりやすく話された。

③第 51 回地名フォーラム　39 名　参加

日時　2019 年 1 月 27 日（日）14:00～17:00

場所　龍谷大学　大宮学舎　東黌 301

報告　明治維新の京都を歩く

入江　成治氏　　（本会理事　事務局長）

発表　西郷隆盛のひとり娘 菊草の終焉地

（西郷菊次郎の京都邸）について

原田　良子氏　　（本会会員　歴史研究者）

原田氏は西郷菊次郎邸が聖護院の境内にあったことを緻密に考証された。

3　地名ウオーク　　参加者 23 名

日時　2018 年 12 月 1 日（土）13:15～16:00

案内者　酒井　源弘氏（本会理事）

時間がおして解散時間が遅くなったことは改善すべき点だが、普段は見られない場所を案内してもらい満足度が高いウオークになった。

4　京都新聞社　「地名ものがたり」の出稿について

2018 年 4 月 1 日から 2019 年 4 月 30 日まで京都新聞紙上に「地名ものがたり」を連載した。周年事業の一環として連載記事をリファインして書籍化することを計画している。

5　会誌・会報発行

①会誌「地名探究」17 号　2019 年 4 月発行

②会報「都藝泥布」62・63・64・65 号

第二号議案　2019 年度　活動方針　予算計画

活動の柱

☆会員の拡大をめざして地名研究の魅力を発信する。

☆会員相互の意見が交流できる魅力的なフォーラムを企画し、広報に力を入れる。

☆周年事業として出版事業などに取り組む。

第三号議案　役員人事

顧問　　所　　功・中西　進・吉田金彦（新）

名誉会長　　綱本逸雄（新）

会長　　小寺慶昭（新）
副会長　　金坂清則・小西宏之（新）
会計　　岩田　貢（新）
事務局長　　入江成治
会計監査　　清水　弘・高重久美（新）
編集（新）　中島　正・入江成治
運営委員（新）5 名
小寺慶昭・小西宏之・岩田貢・中島正　入江成治
理事 26 名
明川忠夫　天野太郎　安藤信策　糸井通浩　石田天祐
入江成治　岩田 貢　梅山秀幸　大野克二　尾崎聖二郎
柿木重宜　片平博文　金坂清則　久保田孝夫　小寺慶昭
小西宏之　酒井源弘　小牧誠一郎　笹川博司　芝野康之
清水 弘　高重久美　中島正　堀田悟史　山口富蔵
山口 均
顧問　梅原　猛先生
逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。
退任理事　忠住佳織・水野孝典（退会）
長い間お世話になり、ありがとうございました。

第四号議案　会則改定

運営委員と編集担当を役職として明文化した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

会長退任記念講演

演題　万葉の未詳地名を考える（京都編）

綱本　逸雄　（本会名誉会長）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

（綱本　逸雄氏）

万葉集をひもとくと、未詳地名が多く有る。従来、戦前から多くの著名な万葉研究者による大部の注釈書、万葉集事典が出版されているが、歌の解釈は当然の研究課題であるが、いずれも地名については未詳で済ませている。京都にも未詳地名が多くある。たとえば、恭仁京付近の布(ふ)当(たぎ)、活(いく)道岡(じのおか)（同山、同路）、泉の杣、多奈久良、名木河、菟道の宮子、納(いり)野(の)など 30 カ所以上ある。これらの地名について、地名研究の立場から考えてみた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

研究発表

テーマ　偽書の偽書性と資料価値

『丹後国風土記残欠』の場合

糸井　通浩　（本会理事）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

（糸井　通浩氏）

いわゆる『丹後国風土記残欠』という文献がある。これまでの研究で「偽書」と認定されている。古「風土記」の一部と思わせる記述になっているからである。それ故不用意に文献として引用、ないし活用することはできないが、しかし「風土記」となると地名研究にとっても無視　できない資料だと言える。これまで村（邨）岡良弼氏や加藤晃氏によって偽書とする根拠が指摘されてきた。この点は揺るがないが、しかし、いつ頃の、誰による偽書なのか（偽書の成立背景）については、見直してみるべき点がなおあると考える。また資料としての価値（古伝承を含むなど）も正確に把握しておくことが肝要であろう。「中世神話」の時代と偽書の隆盛、「偽書」とは何かを前提に、同じく偽書とされている、所謂「但馬国司文書」との記事の共通性や「与佐の大山」や「伊去奈子嶽」（現・磯砂山）の登場の意味するものなど、また当偽書と『勘注系図』（国宝・籠神社蔵、国宝「海部氏系図」の注釈書）との関係や中世の丹後一宮籠神社の修験僧「智海」の存在とその文化活動などを参考にして、偽書性を「再考」すべき点（根拠）をお話した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

新・地名ものがたり（2）

蕪村の詠んだ京の地名句

尾崎聖二郎（本会理事）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

現存する 2900 余りの蕪村の句の中で、私がとりわけ気に入っているのは、

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉

の句である。僅か十七文字の中に、史上有名な戦乱の一コマが活写され、そこには戦い前夜の武者たちの緊迫感、息遣いがうかがえ、それを野分（台風）がおおきな背景としてカバーしている。かれらの行き先は都の南の鳥羽殿という舞台。

これが俳句の素材である。俳人中村草田男もその『蕪村集』の中で､｢この句は絵巻物の美を見事に文字に移し得た点において傑出している」と評している。また俳句には詠史句というジャンルもあるが、この句は「蕪村の歴史に取材した句の中でも独特の美を発揮した名作」とまで絶賛している。
句中にある鳥羽殿とは保元の乱の前に白河天皇がに造営された離宮で、その名は今も伏見区竹田鳥羽殿町という地名で残っている。ここには現在、京都を代表する企業｢京セラ｣の本社や府の総合見本市会館「パルスプラザ」などもあり、現代の産業文化を体験する場となっているが、これと平安時代の公家文化と比べても面白い。我田引水かもしれないが、これも地名を探る面白さではないだろうか。

現在、地名を探る意義はいろいろ語られているが、日本という国において地名ほど歴史を具体的に語ってくれる遺物はあまりない。蕪村は地名を俳句に率先して取り入れたいわば先駆者ではないだろうか。地名俳句には花鳥諷詠句や単なる写生句にはない想像力や発想が必要である。地名そのものは動かせないが、俳句の上でその地名から得た史実、魅力、想像を結びつけるのは難しいが面白い作業だ。

蕪村の句には、地名そのものを大胆に取り上げた句や、これら地名を史上の大事件と結びつけた句、あるいは過去の市井の人間の営みの中から拾い上げた名句など作句の幅は広い。私はそんな蕪村の幅広い発想に興味をもっている。
例えば、詩人萩原朔太郎はその『郷愁の詩人与謝蕪村』で蕪村の「春水や四条五条の橋の下」の句は唐詩選の詩句からの連想としながらも名句であると称揚した｡｢時鳥平安城を筋違いに」の句は、深夜、碁盤の目に区画された京の街を突如斜めに横切る時鳥をその鋭い鳴き声で描写し、王城の広さを描いて見事な句だと評価は高く、また「女倶して内裏拝まんおぼろ月」の句は、現在より入りやすかった京都御所との町人の身近なつながりがうかがえて面白い｡｢若竹や夕日の嵯峨となりにけり」の句では夕日を背景に竹藪の名所嵯峨の若竹を趣き深く詠んで、嵯峨という地名を強く喧伝してくれた。
また、蕪村の詠史句の代表作として知られる

白梅や墨芳しき鴻臚館

の句は、平安初期に七条大路の北に朱雀大路をはさんで設けられた、渤海使を迎えるための迎賓館であった鴻臚館の名を今に残してくれた。もちろん鴻臚館は渤海の滅亡とともに衰微して、蕪村のいる江戸中期にも既に存在していないが、彼は建物のイメージを地名に置き換え､想像の世界に遊ばせて、白梅と墨の香と共にその雰囲気を句に再現してくれた。このように蕪村には地名句は多く興味は深い。これからも私は地名や歴史と共に大いに学びたいと思っている。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地名随想　　寺の名が付く地名（２０）

大恩寺町

清水　弘(本会理事)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「大恩寺」の名が付く町名は２ヶ所ある。一つは、中京区衣棚通夷川下ルにある「竪大恩寺町」で、衣棚通を挟み、夷川通から二条通の北までの南北の両側町である｡もう一つは、その南側にある「大恩寺町」で、二条通を挟み、室町通の西から新町通の東までの東西の両側町である。共に浄土宗の大恩寺がこの地域にあったことによる町名である。『京都坊目誌』に「中昔　北側に大恩寺あり、故に名とす。寺は僧天河の開基にして浄土宗なり。天正年中に京極に移る。」とある。

「大恩寺町」と「竪大恩寺町」は、共に寛文５年（1665）刊の『京雀』に町名が記されているので、江戸時代初期からの町名であることが分かる。ここにあった大恩寺は、豊臣秀吉の都市改造によって、東京極大路（寺町通）へ移転させられたのである。移動後のこの寺の位置については、慶安５年（1652 承応元）刊の『平安城東西南北町並図』を見ると、寺町通丸太町の東側に「大恩寺」と記されている。

寺町丸太町に移転した大恩寺は、宝永５年（1708）３月８日の「宝永の大火」によって類焼し、東大路通二条の北門前町に再移転し、現在もこの地にある。『京都坊目誌』は、「仁王門新高倉の東に移転した。」と記しているが、これは誤りであろう。

付記　「地名随想」も 20 回を数えたところで、筆を置くことにします。ご愛読を感謝します。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

筑紫「地名ものがたり」

大伴旅人・『万葉集』961 湯原

沖村　由香　（本会会員）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

大伴旅人は大宰帥として筑紫に赴任後、ほどなくして妻を亡くした。『万葉集』に収められた妻を想う次の歌（巻 6-961）は、大宰府都府楼址から南に二キロほどの地にある次田（すきた）の温泉（ゆ）（現在の福岡県筑紫野市二日市温泉）で詠まれたとされている。

帥大伴卿の次田の温泉（ゆ）に宿りて、鶴（たづ）が音（ね）を聞きて作れる歌一首

湯の原に鳴く蘆鶴（あしたづ）はわがごとく妹（いも）に恋ふれや
時わかず鳴く

【原文】湯原爾鳴蘆多頭者如吾妹爾戀哉時不定鳴

この歌にある「湯原」について、九州大学教授であった福田良輔氏（明治 37 年生・京都大学卒業）は、『九州の万葉』（1967 年）で、次のように述べている。

ところで、旅人の歌の初句の「湯の原に」の「湯の原」は、これまでの万葉集の注釈では、どの本も、だれも「ユノハラ」と訓んで、複合の普通名詞と見て、温泉の出る野原の意に解している。しかるに、明治十五年に作成された『御笠郡字小名調』の二日市のところに、『湯町』などの小字（こあざ）とともに、『湯の原（ハル）』※とふり仮名がついた小字が出ている。そこで、筑紫野町役場で調べると、『二日市大字二日市全図』という番地入りの書かれた土地台帳が見付かった。

（中略）

そこで、考えられることは、大伴旅人が次田の温泉に宿って、「湯の原に鳴く蘆鶴は」とよんだ「湯の原」は、従来の解釈のように、温泉の出る原の意ではなくて、万葉時代にも、すでに小区域の地名であって、ほぼこれまで述べた今の小字「湯の原」あたりを指したものと思われる。（中略）

ただ『日本古典文学大系』の『万葉集』だけが、その理由は述べていないが、「湯の原」は「万葉時代すでに地名化していたか」と註しているのは殊勝である。

福田氏は、普通名詞と解釈されてきた「湯原」を地名とみたのである。

『万葉集』には、ほかに道後、白浜、有馬、伊香保、湯河原などの温泉地ゆかりの歌があるが、この歌以外に「湯原」の語は使用されていない。また、記紀歌謡、八代集に「湯原」や「ゆのはら」が詠まれた歌の例は見当たらないことから、温泉の湧く野原を指す「湯原（ゆのはら）」という普通名詞は和歌の一般的な用語でないと考えられる。

一方、地名化された時期は不明だが、温泉地には現在も「湯ノ原」「湯之原」などの地名がみられる。

この問題は、古地名「湯原」を調査することと、旅人の歌と巻六の表記の特徴を研究することで、より正確な結論を得ることができるのではないだろうか。

しかし、福田氏による半世紀前の地名説の提案は研究者諸氏の目に留まらなかったのか、2013 年出版の岩波文庫『万葉集（二）』は依然として「温泉の湧く野原」という解説であり、他のいくつかの訳本にも地名とするものは見当たらない。『古典文学大系』が地名化していた可能性に言及していたのだから、後退したとも言えるだろう。

在九州の会員として、福田良輔氏の「湯原」地名説をご紹介すると共に、『万葉集』筑紫歌壇で詠まれた地名にも注目が集まることを願っている。

※福田氏は「旅人の歌における『湯の原に（湯原爾）』は、『ユノハル二』と読むべきものである」としている。九州地方の「原」のつく地名は「ハル」と読むケースが多い。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【講演報告】

近江の地名ものがたり

小寺　慶昭（本会会長）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

去る 5 月 25 日、京都新聞社主催の「湖灯塾」(滋賀中央信用金庫協賛）が近江八幡市で開かれ、「近江の地名ものがたり－近江八景を中心に－」と題して講演を行った。定員 60 名の会場に多くの補助席が用意されるほどの盛況ぶりで、改めて京都新聞連載の「地名ものがたり」の影響力の大きさを思い知らされた。講演の概要は以下の通りである。

まず、「滋賀」「比叡」「和泉」「梅田(大阪市)」などの地名を採り上げ、地名を考える上での基本的なアプローチの仕方を説明すると共に、「地名はその地域の歴史を背負っているが、語源を確定出来ないものの方が多い」ことをご理

解頂いた。近江八景の地名(寺名を含む)を採り上げたのは、一般に著名なだけではなく、近江の地名の特色の一端をよく表していると考えたからである。

「比良の暮雪」の「ヒラ」は、「山頂部が準平原で平坦だから」ではなく、黄泉比良坂(よもつひらさか)の「ヒラ」で、崖等の傾斜地形を表していると考えられる。『万葉集』の「ささなみの連倉山(なみくらやま)に雲居れば雨そ降るちふ帰り来わが背」の連倉山は比良山系を指すと考えられ、「クラ」は大蛇嵓(だいじゃぐら)・千石嵓等の「クラ」である事も傍証になる。最高峰の武奈ケ岳はブナの木に由来する名前だが、山域中には蓬莱山・釈迦岳・ホッケ山・薬師ノ滝・毘沙門岩等、主に仏教に関係する名称が多く見られる。比良山系は天台修験の行場であり、山岳修行者達の聖地であったためであろう。実は、太神山･飯道山･金勝山･三上山･菩提寺山･太郎坊山･綿向山･天吉寺山･己高山等々、琵琶湖を取り巻く多く山々が修験道の道場になっていて、湖国は山岳宗教が盛んな地であった。その典型例を比良山系の地名に見る事が出来るのである。

「唐崎の夜雨」の「カラサキ」は名前の通り「渡来系の人々が多く住んでいる、湖中に突き出た地」の意味であろう。湖国は全域に亘って渡来人が多かったが、特に真野郷・大友郷・錦部(にしごり)郷・古市(ふるち)郷の四郷からなる滋賀郡(比叡山麓から瀬田川西南岸まで）は、五・六世紀以降、和爾氏･大友氏･穴太氏･錦部氏等、渡来系の氏族が多く居住する、文化的にも当時の最先端の地であったことを物語っている。天智天皇の子・大友皇子の名前も、天皇と大友氏との関係を示唆している。壬申の乱に敗れた皇子の霊を鎮魂する気持ちが、今も「皇子山公園」の名に込められているのであろう。

「堅田の落雁」の「カタタ」は、当地の西に位置する堅田丘陵に関係する。京都市の「帷子ノ辻」と同じ命名法であり、柳田國男翁の「カタビラと名付けた理由は全く一方山に拠り一方は田野を控えて居る為にすなわち片平と言ふのであろう」(『地名の研究』）との考え方で解ける。

「三井の晩鐘」の「ミツイ」は、井戸・泉からの命名である。当山麓には「無垢井･金殿井･清水」等、天智天皇の水伝承に関わる地も多い。翻って考えると、近江は琵琶湖があるにもかかわらず雨乞いが必要且つ盛んな地であった。その意味でも、当地に龍神伝承が多く伝わっていることや、それらに関連する地名がもっと注目されてもよいだろう。(「矢橋･粟津･石山」については割愛する)

「瀬田の夕照」の「セタ」は、「セタ＝セト＝瀬戸(門)」で、水路の狭くなった所との説があるが、瀬田川の左岸のみをさす地域名である事に矛盾する。「瀬の向こうの田・瀬と田のある所」でいいのではないか。畿内と東国の地図上の境は逢坂の関だが、実質的・心理的な境界は瀬田川であったことが重要だ。『田原藤太物語』や『今昔物語集』の「嫉妬心から妻が箱を開ける話」（巻 27）がそれを物語っている。橋の下に龍宮という異界があってもおかしくないほどの、現実世界がほころぶ危険で非日常的な割れ目と認識されていたのである。

近江八景は、よく知られているように瀟湘八景を模したものだ。ただ、中国では「漁村夕照」「遠浦帰帆」のように、一般名詞化した広いエリアを指すのに対して、ポイントとしての地名を律儀に限定している所に、日本人の持つ名所(などころ）に対する意識が反映していると言えそうである。両者に共通しているのは、鎌倉期以降に盛んとなる文人趣味・中国趣味であり、一言で言えば「山水画・水墨画の世界」である。「琵琶湖」の命名も同じである(詳しくは木村至宏著『琵琶湖　その呼称の由来』を参照)。近江八幡市の西にある小山は、湖上から見れば鶴が舞う形をしている。本来なら「舞鶴山」と名付けられるべきものを、わざわざ「鶴翼山」としたのも、湖上の「竹島」を「多景島」と改称したのも、それぞれ同じ理由からであろう。

なお、幕末に安藤広重が出て、連作「近江八景」を出版し、爆発的な人気を得た。まさに「水墨画の世界」から「錦絵の世界」への大転換であり、文人達が楽しんできた名所を、一般庶民が訪れて楽しむ時代への革命的な転換を決定づけたことに大きな意味があったと言える。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

2019 年度　地名ウオーク実施（報告）

下京区の『源氏と平家の史跡』を歩く

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

2019 年 6 月 1 日(日)

案内人　小西宏之副会長

参加者　理事 5 名　一般 11 名（女性 9 名）

見学スポット（一部紹介）

☆膏薬図子　(四条通西洞院東入ル下ル)

綾小路から四条通りをクランク状に結ぶ路地。平将門を供養した空也（こうや）の念仏道場があったようです。空

也供養「こうやくよう」が音韻変化して「こうやく」になったという説が紹介されました。

☆俊成社　　(松原通烏丸下ル俊成町)

平安末期の歌人藤原俊成の邸宅があったとされます。俊成の弟子で平家の武将、平忠度が都落ちの際に勅撰和歌集に自歌の入集を希望して危険を冒して都に戻り、俊成邸を訪れた話は有名です。今はビルの軒下にあり、祠の上にはある文字（漢字一字）が記されています。

☆佐女牛井跡石碑

源義経の堀川館　(堀川通六条上ル)　跡

頼朝によって放たれた刺客土佐坊昌俊が義経を暗殺しようとして失敗した舞台になった。村田珠光がここの井戸水で茶をたてたといいます。

小西副会長の穏やかでわかりやすい解説で 2 時間を楽しく過ごせました。女性陣の中には入会案内や次回の案内を望まれる方もありました。ご体調が芳しくなかったにもかかわらず、終始笑顔でご案内いただいた小西副会長には厚くお礼を申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第 52 回　地名フォーラムのご案内

日時　2019 年 7 月 28 日（日）

13:30～17:00

場所　龍谷大学　大宮学舎　東黌 301（新築棟）

京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1

JR 東海道本線・近鉄京都線「京都」駅下車、北西へ徒歩約 10 分（市バス約 3 分）

京阪本線「七条」駅下車、西へ徒歩約 20 分

阪急京都本線「大宮」駅下車、南へ徒歩約 20 分（市バス約 5 分）

発表　岩田　貢氏（本会理事）

「環濠集落と地名－南山城の場合－」

【発表要旨】

南山城の大部分を占める木津川流域では、沖積地に環濠集落が多くみられる。環濠集落とは,「中世の防御的集落で、堀（濠）を掘り内側に土塁を築き村落を環状に取り囲んだもの・・・弥生時代～古墳時代の集落遺跡としての環濠集落とは区別されている（岩田･山脇『地図でみる京都―知られざる町の姿―』より)」と説明される。さらに環濠集落には，条里地割に沿う道や丁字形・袋小路などがみられる点や、集落外に通じる道が東西南北の四方か三方かに限定されることなどの特徴がある。加えて，各集落付近には「口」・「浦」・「土井」・「代（だい）」・「城」・「堀」等が付く小字名が多くみられる。『大言海』においては、例えば「浦」は「裏」の義で「裏」には「背後（ウシロ）・後方（シリヘ）」、「土井」が「土居」だとすれば「城ノ周（メグリ）ノ土ノ垣」、さらに「だい代」を「代（しろ）」と読めば「田ヲ作ルベク、墾（は）リシ土地」であるとの解釈がみられる。いずれも集落立地と開墾とに関する地名や、土塁に関連する地名と思われ、集落がもつ先掲の特徴と深い関わりが想像できる。

発表では，環濠集落とされる八幡市の川口・戸津（とうづ）・内里（うちざと），城陽市の寺田・平川および久御山町の佐古・佐山等を取り上げ，地図や現地写真を基に集落に現存する堀（濠）の遺構や丁字路など道路の現況とそれらの共通性をみることにする。また，これら環濠集落にみられるとされる景観の特徴や地名を研究する場合，検討すべき課題が様々に考えられることから，これらに対する私見も述べてみたい。

【岩田貢氏　略歴】

1950 年京都府生まれ。

京都教育大学教育学部卒。元龍谷大学法学部教授（教職課程）

編著に『防災教育のすすめ―災害事例から学ぶ―』古今書院・共著に『京都地図絵巻』古今書院・『京都学を楽しむ』勉誠出版『京都地名語源辞典』東京堂出版・『地名が語る京都の歴史』東京堂出版・『地図でみる京都 知られざる町の姿』海青社など

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

発表　　永田良茂氏（本会会員）

「縄文アニミズムと人体語地名例」

―梅原猛先生を偲んで―

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「人文知の巨人」と呼ばれた梅原孟先生が亡くなられた。自分が地名に取り組んだのは梅原仮説と自ら称された､｢アイヌ語は縄文語を引き継いだ｡｣を何となく証明できると思えた

からであった。

E.B.タイラーは原始社会の宗教観として、自然の恐怖と畏敬の念から生じる「自然は生きている」とする考え方を「アニミズム」と称した。知里真志保は『アイヌ語入門』の中で、古いアイヌの考え方として、「川を人間同様の生物と考え、人の体と同じ言葉で呼んだ。」、また「山も同様である。」と残している。

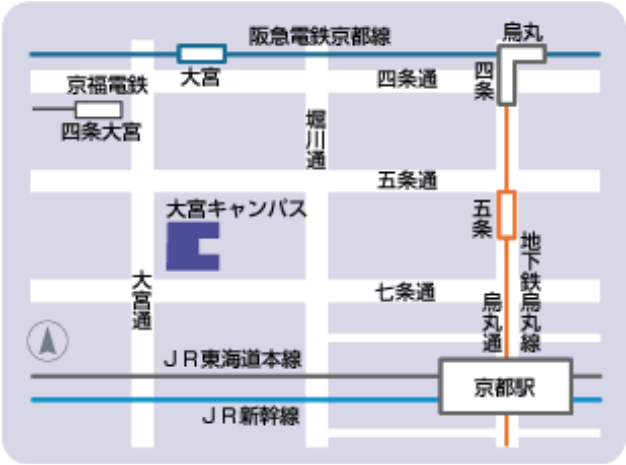
地名は元々当時の人々の簡易な言葉で表された。縄文時代の上記のような考え方を縄文アニミズムと呼ぶと、日本語では分からないがアイヌ語による人体語として語源分析すると分かる人体語地名が各地に豊富にあることがわかる。縄文人の名付けた縄文アニミズムにもとづく人体語地名が梅原仮説の正しいことを示し、多くのアイヌ語による人体語地名を見いだすことができる。

以前、日本語語源研究会で「川に関する地名」、「鼻に関する地名」を発表したのでこれらは結論のみ報告し、「頭に関する地名」の例を主に示し、「お尻」や「アゴ」や「文型としての人体語形式の地名」の例なども示してみたい。京都の地名から「音羽（山)」、「比叡（山)」や「愛宕（山)」も人体語と関係すると考える。『大鏡』に百鬼夜行が現れる「アハハの辻」の「アハハ」もアイヌ語 apa/apaha であり、当時まで縄文の言葉が残されていたことを示している。

【永田良茂　氏　略歴】

大阪大学基礎工学部電気工学科卒。三菱電機（株）通信機／制御製作所勤務。アイヌ語地名懇親会会長

主な著書『古代人の心で地名を読む』、『古代人の心で山名を読む』、『日本語の起源とアイヌ語』、『神戸のアイヌ語地名』（いずれも友月書房）



次回会場　龍谷大学大宮学舎案内図

寄贈御礼

「熊本乃地名」　熊本地名研究会様

「想いのカタチ」(リーフレット)　北斗書房様

日本言語文化研究　第 24 号　5 月 1 日発行

地名　宮城県地名研究会

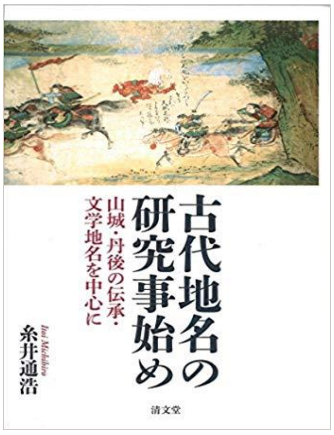
ご著書　植村正純　様

会員業績

糸井通浩理事の著作が 2 冊出されました

『古代地名の研究事始め』

山城・丹後の伝承・文学地名を中心に



清文堂　8,600 円

2019 年 4 月 25 日発行

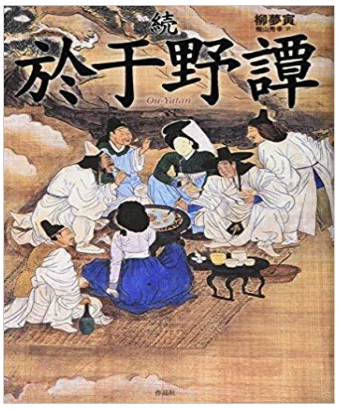
『かぐや姫と菅原道真』

和泉選書　2,600 円

2019 年 6 月 10 日発行

『竹取物語』の作者は菅原道真であるとする説を展開されている。

梅山秀幸理事の訳業



柳夢寅『続於于野譚』

作品社　3,800 円

梅山秀幸訳

2019 年 5 月 10 日発行

16～17 世紀、李氏朝鮮

朝鮮庶民の見た秀吉出兵

中島正　　恭仁京から紫香楽宮へ

『古代の都城と交通』　川尻秋生編　所収

黄當時・沖村由香

古代日本語における異文化の要素

南島神話と日本神話の固有名詞に見られる

後置修飾表現

永田良茂　『日本語の起源とアイヌ語』　友月書房

岡田茂　　『能登島から武蔵へ』

『北陸から東海道へ』

『尾張から信濃へ』

当研究会のホームページをご覧下さい

Yahoo などで「京都地名研究会」と入力すると

メニューがヒットします。各種情報を定期的に更新できるよう努めます。「コンタクト」のページから当研究会への要望や意見を書き込むことができますので、ぜひご活用ください。

会誌「地名探究」会報「都藝泥布」の原稿を募集しています

ご寄稿の際には、会誌『地名探究』最新号の「原稿募集要項」をご参照ください。「都藝泥布」の原稿もあわせて募集しています。詳細につきましては、京都地名研究会事務局までお問い合わせください。

会費納入の依頼

今年度、または今年度を含む過年度の会費が未納の方は至急納入方、よろしくお願いします。

納入状況のお問い合わせは事務局まで。

お願い　会員の方の著作や業績をご紹介しますので、事務局までお知らせください。

編集後記

フォーラムで２度発表していただいた本会会員の原田良子氏の活躍が新聞各紙で報道されました。2019 年 6 月 13 日付の京都新聞（全面）では、大久保利通茶室「有待庵」（京都市上京区）の現存を確認された興味深い経緯が写真付きで大きく紹介されています。薩長密談の茶室として維新の現場となった貴重な歴史遺産が消滅する間際で、原田氏は日本史家の磯田道史氏の助力などを得て門川大作氏の移築保存の英断を引き出されました。心より賞賛の拍手を送ります。　（い）

京都地名研究会への入会案内

千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。

年会費	3000 円
賛助会員・理事	5000 円
家族会員	1000 円

事務局　お問い合わせ先

京都地名研究会事務局長　入江　成治

610-1126　京都市西京区大原野上里男鹿町 14-5

Tel　090-6916-6837

E-mail：kyotochimei@gmail.com